

## 「弁証法」の応用認知言語学的一考察

高坂浩一

### 1. はじめに

本論では、応用認知言語学のアプローチで多義語習得の方法を提案するものである。特に、例えば「走る」や「世界」などの一般的に使われる多義語ではなく、よりアカデミックな多義語に注目する。これは、教員が授業の中で自らの専門分野における用語を生徒に説明する際に、一つの有用な方法として使えるようにするという目的があるからだ。

では、本論ではどのような多義語を考察するのか。それは、弁証法（ディアクレティケ）という言葉だ。この言葉は哲学用語として知られている。ディアクレティケというのはギリシャ語である。古代ギリシャのエレア出身のゼノンがその創始者であると言われている。この言葉は時代が下るにつれて、様々な哲学者によって様々なコンテキストで使用され、その都度意味を少しずつ変えていった。現在ではヘーゲルの弁証法が、弁証法のプロトタイプとして定着したが、本論では弁証法の本質（コア）を明らかにする。

繰り返しになるが本論の目的は、様々な意味が生まれたこの弁証法という言葉、応用認知言語学的アプローチで分析し、教育に応用することである。

### 2. コア理論

多義語の理論の一つに、コア理論がある。この理論は、田中(1990)によって提案された。まず、コアとは何かを説明する。多義語とは文字通り、意味がたくさんある語のことを意味する。しかし、コア理論は、多義語とは本来単純で曖昧なものであると捉える。その考え方の拠り所として、田中は Bolinger(1977)のある指摘を引用する。

Now we find a single overarching meaning which performance variables imbue with local tinges that pass for distinct senses. The deception is like what happens when we meet an acquaintance in an unexpected setting: we may not recognize him.

a single overarching meaning というのは、語の本来の意味であり、variables というのは、文脈によって調整された意味である。田中は前者を「コア」と名付けた。コアは、文脈を捨象して生まれる意味の在り方である。即ち、抽象化に抽象化を重ねて生まれる意味のことである。田中はこれを図1のようなモデル図で表している。

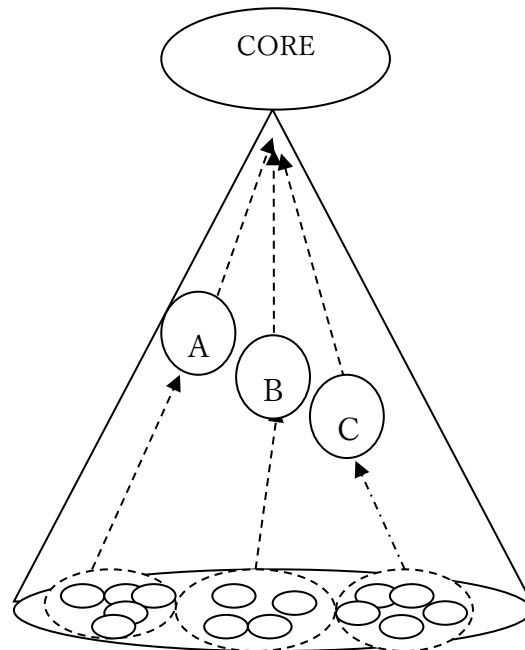


図1 多義の抽象化のプロセス

図1は、ある語の、文脈依存から脱文脈化に至るまでのプロセスを表したモデル図である。この円錐の底面は、文脈に依存した様々な語義を表している。これらの様々な語義を抽象化すると、真ん中の、文脈横断的な意味のタイプがつくられる。そして抽象化をさらに進めると、最終的には脱文脈的なコアを想定することができるということである。

コアには説明的な記述と図式（スキーマ）的な記述が可能で、後者の図式的に記述されたコアをコア・スキーマと呼ぶ。コア・スキーマは、人間が自らの身体で現実世界と関わって創り出される認知的な構造のことである。このコア・スキーマに対して、様々な認知操作(cognitive operations)を加えることで、多義が生まれると考えられる。例として、田中(1990)の over のケースを挙げる。図2はその over のコア・スキーマである。

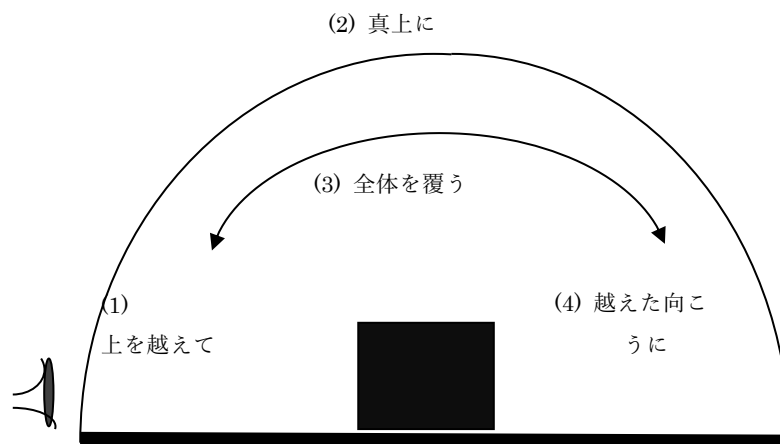


図2 over のコア・スキーマ

このコア・スキーマに様々な認知操作が加えられることで多義が生まれる。まず、(1)の上を越えては、焦点化という認知操作がなされている。焦点化とは、図式の中のあるドメインを前景化する、即ち際立ちを与える認知操作のことである。(1)では、対象が障害物の上を超えるように移動する経路が焦点化されており、「～を越えて」という意味になる。(2)は、障害物の上の孤の頭頂部が焦点化されていて、「何かの上に」という意味になる。(3)は孤の全体が焦点化されていて、「何かを覆う」という意味になる。(4)は主体が障害物の前方にあり、孤を描くように心的走査という認知操作が行われていて、「～を越えた向こうに」という意味になる。図3は over の意味構造をわかりやすく概観するためにつくったものである。

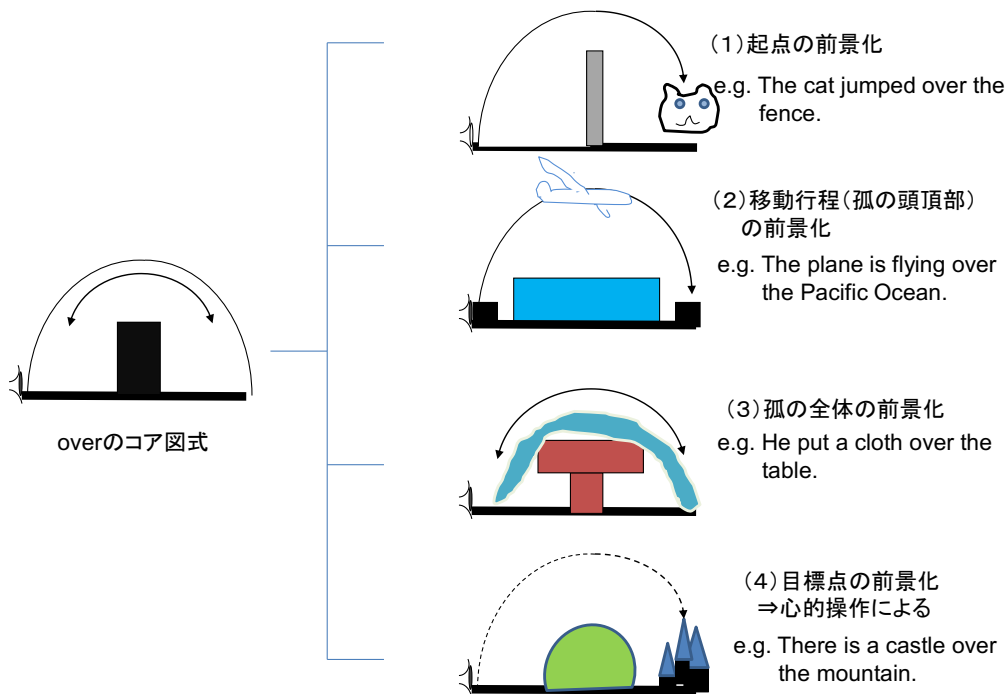


図3 over の意味構造

このようにコア理論は、コア・スキーマに対して認知操作を行い、多義語の説明をしているということである。

本論ではコア理論によって、弁証法を分析する。多義語の説明理論には、語彙ネットワーク理論<sup>1</sup>もあるのだが、コア理論の方が語彙ネットワーク理論に比べて教育へ応用しやすいため、コア理論を用いる。というのも、やはりコア理論の方が、一つのコアから多義を説明する単純明快なモデルを提案するため、わかりやすいという教育的な理由があるからである

<sup>1</sup>語彙ネットワーク理論とは、プロトタイプを中心として意味的な拡張の動機づけにより、様々な語義が放射状のカテゴリーを形成するという考えである。

### 3. 弁証法の多義

まず、弁証法の多義を挙げる。弁証法について論じている哲学者の言説をまとめると、弁証法には次のような意味がある。

- ① 帰謬法（ゼノン）
- ② 詭弁的推論（ソフィスト）
- ③ 問答法（ソクラテス／前期プラトン）
- ④ アイデアの証明法（中期プラトン）
- ⑤ 分析法・総合法（後期プラトン）
- ⑥ 通説からの推論（アリストテレス）
- ⑦ 仮象批判の帰謬法（カント）
- ⑧ 絶対精神への観念論的運動法則（ヘーゲル）
- ⑨ 社会の唯物論的運動法則（マルクス）
- ⑩ 自然の唯物論的運動法則（エンゲルス）
- ⑪ 主体的真理の運動法則（キルケゴール）
- ⑫ 個の全体化の運動法則（サルトル）
- ⑬ 理性の否定的運動法則（アドルノ）

カッコ内はそれを提唱した哲学者である。続いて、それぞれの意味について解説する。

#### 3.1. 帰謬法

この帰謬法というのは、ゼノンの用いた証明の方法である。帰謬法というのは、即ち背理法のことである。ゼノンは、自分が真であると信じることを直接に論証するのではなく、その真であると自分が信じるのが誤っていると仮定し、論理的な推論を進めて結論を導き、この結論が偽であることを明らかにすることによって、先の仮定が誤っていること、したがって自分の説が正しいことを証明するのである。

例えば、ゼノンは真実在は不動であると考え、運動などは実在するものではないと信じるのだが、この信念の正しさを証明するために、その信念がもし誤っていたならばと仮定する。つまり、運動があるとすればという仮定を置いたのである。そして、運動の現象について、あの有名な「飛んでいる矢は静止している」証明を行った。即ち、ゼノンは、運動があるという命題が偽であり、したがって運動がないことが真であることを証明したのである。

この証明法を後にアリストテレスが弁証法と呼んだことから、ゼノンを弁証法の開祖とみなすようになった。これが、弁証法に帰謬法という意味がある所以である。

#### 3.2. 詭弁的推論

3.1 で述べたゼノンの弁証法（帰謬法）を、論争において相手を論破する道具として使うようになったのがソフィストである。ゼノンと異なる点は、ゼノンはあくまで自分の信じることを証明するために弁証法を用いたのだが、ソフィストは論理的な厳密性を必ずしも忠実に維持することはなく、ただ相手を打ち負かすだけのために、論理をこねくり回して弁証法を墮落させてしまった点で

ある。例えば、以下はソフィストの詭弁の例である。

「アテネの人は嘘つきです。私はアテネ人だ。したがって、私も嘘つきだ。しかしながら、私が嘘つきであれば、私が述べることの反対は、本当であろう。故にアテネの人は嘘つきではない。しかし、アテネの人が嘘つきでないなら、わたしが言ったことは本当であろう。したがって、アテネ人は嘘つきであろう。」

このように、論理をこねくり回して論争相手を翻弄し、言い負かすということが盛んに行われるようになり、故に弁証法に、詭弁的推論という意味が生まれたのである。

### 3.3. 問答法

問答法とは、相手に質問を繰り返すことで、相手の答えに含まれる矛盾を指摘し、無知を自覚させることで真理へと導く方法のことである。これはソクラテスが実践した方法である。彼は、市民が自分の力で真実の知識や生き方を産み出すことができるように手を貸してやり、そのために問答によって問いつめ、自分が知っていることと知らないことの境界線に気づかせようとした。これがあの有名な「無知の知」である。

3.1 で述べたように、ソクラテスはゼノンの帰謬法を弁証法の開祖とみなしたため、ソクラテスの問答法も基本的にはゼノンの論法と本質的には同じである。何故なら、ソクラテスも相手の説をとりあえず真であると仮定し、論理的推論によって、この仮定が結局は偽であるということを、問答の過程で相手に気付かせ、認めさせたからである。

このように、ゼノンとは異なり、真と仮定した命題が偽であることを相手との問答の中で明らかにしたため、この問答法というのが弁証法の意味の一つとして確立したというわけである。

### 3.4. アイデアの証明法

プラトンは、アイデアという物事の本質が実在するというアイデア論を提唱した。プラトンにとって弁証法とは、個々のものを廃棄しながら原理そのもの（アイデア）へと進み、そこで原理が確定することになるように進む方法のことである。弁証法は諸学の最も上にある。即ち、その上にはいかなる学問もないということだ。このことから、プラトンにとっては弁証法は哲学そのものであった。

ところで、このプラトンの弁証法は、ソクラテスの弁証法とは性質を異にしていることに気づく。ソクラテスの弁証法は問答法であり、それは他者との対話の中から真理へと至るという方法であった。一方でプラトンの弁証法には、一見そういった対話形式のモデルは見られない。しかし、プラトンは、思想とは魂が自分自身とかわす対話であると考えている。したがって、プラトンの弁証法は魂が自分自身とかわす対話に基づくのである。

### 3.5. 総合法・分析法

プラトンにとって弁証法は哲学そのものであったが、晩年になってくると、プラトンの哲学の内容が大きく変わってくる。理論と実践が分裂し、そして実践的な面を排除して、理論的な方向へと進むことになる。即ち、弁証法が哲学から切り離されて、方法論の方向へと進むのである。晩年になるとイデア論が後退するため、必然的に弁証法も、イデア論との関連を失っていくことになった。こうして、方法論的な方向に進むのだが、それによって登場するのが総合法と分析法である。総合法とは、個々のものを総観して、ただ一つへの形相へとまとめることであり、分析法とは、様々な種類にしたがって分けることである。総合と分析によって事物の本質を追求する、この方法がプラトンの弁証法である。

### 3.6. 通説からの推論

アリストテレスは、学問を理論学、実践学、制作学の3つに分けた。そしてそれらの前提となる方法論として、論証的推論が挙げられるが、アリストテレスは、弁証法、即ち弁証的推論と、この論証的推論を区別した。

アリストテレスは、弁証法は二つの相反する主張の訊問であるとする。「AはBである」と「AはBではない」という二律背反（アンチノミー）の訊問である。そして、弁証的な推論は、通説からの推論である。二つの主張のいずれもひとしく関わりを持ち、それぞれの判断を訊問する。それぞれの主張の前提は何か、それぞれの前提はどちらの方が受け入れられるのか、ということも訊問する。

これに対して、論理的な推論は、「AはBである」と「AはBではない」という主張のいずれかしか採用しない。論理学の根本法則である矛盾律によれば、相反する二つのものが同じものに同時に属することは不可能であるからだ。

### 3.7. 仮象批判の帰謬法

カントの弁証法は、しばしば弁証法と訳さずに弁証論と呼ばれる。何故なら、カントはゼノンやソフィストの弁証法を、ただの詭弁術や討論術であるとし、仮象が真であると見せかける術であると、即ち仮象の論理学であると批判したからである。つまり、先人の弁証法を批判するために、弁証論と呼ばれることがあるのだ。しかし、カント自身は、この批判自体を弁証法と呼ぶため、弁証法という訳でも差し支えない。

カントによれば、理性は二つの相反する提論を導く。例えば、「世界には始まりがあり、時間と空間は有限である」というテーゼと、「世界には始まりはなく、時間と空間は無限である」というアンチテーゼが挙げられる。これらは、経験によって証明されることはないため、当然反駁されることもなく、それ自身において矛盾がないだけで、理性によって定説として主張される。カントは、人間が経験できない世界を仮象とし、仮象を生み出す理性に限界を定めようとする。これがカントの弁証法である。

### 3.8. 絶対精神への観念論的運動法則

ヘーゲルは、精神は本質的に絶対的なものであると考える。これを絶対精神と呼ぶ。絶対精神とは、他を否定して自分に帰ることによって自分になる循環のことである。ヘーゲルは、このことを世界史の発展のアナロジーを根拠に論じた。歴史の目的は、自由である絶対精神が段階を経て、自らの自由を自覚して自己実現していく過程であるという。つまり、最終的には自由を達成した精神は絶対精神になるということである。精神に対するこのような観方を進歩史観という。

そして、この歴史のアナロジーによって、人間の精神というのは本質的に他と区別されることのない唯一のものであると考える。つまり、他者とは自分自身を止揚（アウフヘーベン）<sup>2</sup>し、自分自身と同一のものであるということだ。

### 3.9. 社会の唯物論的運動法則

マルクスは、ヘーゲルの弁証法を援用した。ただし、ヘーゲルのように観念論的ではなく、唯物論的に論を展開した。マルクスによれば、歴史の原動力となっているのは物質的な生産力である。生産力は、生産に従事する人の数が増えたり、技術革新が起こったりすることで発展するのだが、対照的に生産関係（例えば資本家と労働者、封建領主と農奴の関係）はすぐには変化することはない。しかし、それも時間の問題で、生産力が増えたことで生まれた生産関係の矛盾によって、弁証法的に新たな段階の制度にシフトするのである。マルクスの歴史の公式によると、原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義制→社会主義制という流れで発展するのだという。このように、支配者と被支配者の対立から新たな制度へとシフトするところに、マルクスは弁証法を見出した。

### 3.10. 自然の包括的唯物論的運動法則

エンゲルスは、弁証法は自然全体をも支配していると考えた。自然はそれぞれの要素が互いに対立しながら次々と生起・消滅していく歴史的過程であり、互いに関連し合い、移行し合いながら、統一的な世界を形成しているとする。この考え方は、マルクスの人間社会の弁証法を自然にも適用したことから、アナロジカルに考えたことがうかがえる。

例えば、生物進化論が例として挙げられる。人間社会が弁証法的に発展するように、生物界（もちろん生物としての人間も含める）も弁証法的に発展する。地球ができたばかりの頃、生物は存在していなかったが、その後最初の生物が無生物から生まれ、生物が進化し、猿から人間が生まれたのである。

また、生物だけでなく、自然は全体として発展している。カント＝ラプラスの星雲説のように、初めに星雲が有り、それから太陽系が生まれたという考え方がある。今日ではこの星雲説が必ずしも正しいわけではなく、宇宙塵などの新しい学説が出ているが、いずれにしても、太陽系が昔から今日のような形であったわけではないことは確かである。生物と同じように恒星にも、幼年期、

<sup>2</sup> 止揚（アウフヘーベン）とは、あるものを否定しつつも、より高次の統一の段階で生かし保存することである。

青年期、老年期の星がある。つまり、星も変化することが知られているのである。

### 3.11. 主体的真理の運動法則

キルケゴールは、ヘーゲルとは異なる弁証法を提唱した。ヘーゲルの「あれも、これも」の弁証法は理念の世界におけるものであって、実存の世界においては、「あれか、これか」のどちらかしか選びとれないとキルケゴールは考える。

例えば、人が何らかの決断をする時、その決断は「あれか、これか」の二者択一である。決断した瞬間に「どちらも」選び取ることはできない。これはキルケゴールの思想に即して言えば、審美的生き方と倫理的生き方の二つを絶えず選択しないといけないということである。審美的生き方とは、快楽を追求して生きることである。一方で、倫理的生き方とは、理性的・道徳的に生きることである。キルケゴールは、人間がある瞬間においては常にどちらかを選択しなければならないと考える。これらの生き方をする主体をそれぞれ、美的実存、倫理実存という。

そして、審美的に生きることにも挫折し、倫理的に生きることにも挫折した人間は、最終的に宗教的実存となるという。これは、ひたすら信仰心を持って神の前に立つ段階で、ここで人間は真の実存になるのである。このようにキルケゴールの弁証法は、審美的に生きるのか、倫理的に生きるのか、どちらかを選びとりながら挫折を繰り返し、最終的に宗教に辿りつくため、ヘーゲルのような「あれも、これも」の量的な弁証法ではなく、質的な弁証法であるといわれる。

### 3.12. 個の全体化への運動法則

サルトルは要素還元主義を批判した。即ち、全体を個に還元してしまう考え方のことである。この考え方では、社会とは個人の集まりにすぎず、歴史とは個々人の行動の集積であるということになってしまう。サルトルはそのような考え方を分析的理性と呼んで批判した。そして、マルクス主義的な弁証法的理性を重視した。

サルトルは、弁証法を個が全体に向かって止揚しようとする発展する運動として捉え、それを全体化と呼んだ。個々ではなく、それぞれの関係性に着目するのである。

分析的理性では、個々を足し合わせて社会ができると考えるが、サルトルの思考法、即ち弁証法的理性では、個と全体が関係し合って、社会ができると考える。即ち、ある人の行動が社会に何らかの影響を与えたら、社会の中にいるその人はその後何らかの形でフィードバックされ、その人に影響を与える。そして、またその個人は社会に働きかけ・・・という形で、相互に影響し合うのである。そのようにして発展すること、即ち全体化によって歴史はつくられていくということである。



### 3.13. 理性の否定的運動法則

アドルノは、人間の理性の中には野蛮が含まれていると考えた。一般的に神話から啓蒙への流れは、野蛮から理性への流れであると言える。即ち、人間は自然を理性によってコントロールし、進歩してきたと考えられてきた。

しかし、人間は進歩するどころか、例えばナチスのホロコーストのような悲惨な事件を起こした。人間は啓蒙され、合理性によって進歩したのだとしたら、このようなことが起きるのはおかしい。このことを説明するために、アドルノは、人間の理性の中にはそもそも野蛮が含まれていると考えたのである。即ち、人間に内なる自然があるのだ。つまり理性は、自然（野蛮）から生まれた反自然であり、文明にも野蛮が含まれているということだ。そして、これまでコントロールされてきた潜在的な自然（野蛮）が顕現したことで起こったのがホロコーストだったとアドルノは考える。

このように、アドルノは自然（野蛮）と理性の対立に弁証法を見出したのである。ヘーゲルの弁証法は、止揚、即ち否定の否定によって肯定となるという、肯定的な弁証法であったが、それに対しアドルノの弁証法は、否定の否定は必ずしも肯定ではないと考えることから、必ずしも肯定的なく、むしろ否定的な弁証法である。それが否定の弁証法と呼ばれる所以である。

## 4. 弁証法のコア

中埜(1973)は、弁証法に対応することばであるディアクレティケは、ギリシア語で「対話」を意味することから、弁証法の本質的意味は「対話的思考」であると主張する。しかし、3 で挙げた弁証法の多義を見てみると、例えばゼノンの弁証法ひとつとって見ても、対話的思考とは程遠いし、ましてや問答法を行ったソクラテスでさえ、対話というより、誘導尋問のような技術と見ることもできる。このことから、弁証法のコアを新たに提案したい。

2 で述べたように、コアとは抽象化に抽象化を重ねて生まれる意味のことである。即ち、最大公約数的な意味とも言える。また、コアには説明的な記述と図式（スキーマ）的な記述が可能である。続いて、弁証法のコアをこの二つの方法で記述する。

### 4.1. 弁証法のコアの説明的記述

3 で挙げた弁証法の13個の意味を抽象化すると、「対立する二つの要素から、ある一つの結論にいたること」となる。ここで留意すべきことは、弁証法という概念と一般的には切り離せない止揚という概念が、必ずしも弁証法のコアの中に含まれるわけではないということである。例えば、3.13 で述べたように、アドルノの弁証法では、自然と理性の対立に弁証法を見出したが、ヘーゲルのように弁証法を必ずしも肯定的に捉えず、むしろ否定的に捉えていたことからわかる。

一般的に弁証法を説明的に記述する際には、ヘーゲルに代表されるトリアーデ<sup>3</sup>によって記述する。しかし、トリアーデには止揚が含意される。そのため、

<sup>3</sup> トリアーデとは、正・反・合の三つの契機を総称するという語のことである。

弁証法のコアを記述する際にトリアーデはふさわしいとは言えないと考えられる。

#### 4.2. 弁証法のコアの図式的記述

弁証法のコア・スキーマのモデルを図4のように提案したい。

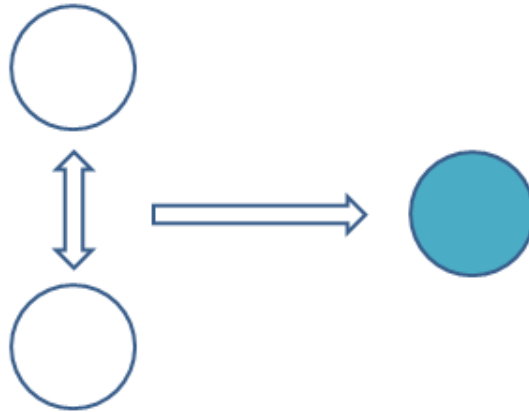


図4 弁証法のコア・スキーマ

ここでは、対立する二つの要素から上に移行するのではなく、右に移行している。これは4.1で述べたように弁証法のコアには必ずしも止揚が含意されないため、コア・スキーマにそれを反映させたからである。Lakoff& Johnson(1980)の *good is up* のようなメタファーからもわかるように、上への移行には進歩を想起させるレトリック的効果があるため、上への移行ではなく右への移行にした。これはあくまで時間的経過を表すものである。

#### 5.終わりに

ここまで、弁証法の多義を抽象化し、コアの記述を試みてきた。今後の課題としては、2点挙げられる。第一に、提案したコアのモデルに再考の余地がないかを確認することである。第二に、このコアにどのような認知操作を加えることで、様々な意味へと派生するのかを説明することである。その際にも、説明的な記述と図式(スキーマ)的な記述の両方を行う。特に、図式的な説明を行うことによって、より教育的な効果を高めることが期待できる。

### 参考文献

- アドルノ,セオドア他 (2007)『啓蒙の弁証法』岩波書店.  
アリストテレス (2007)『トピカ』京都大学学術出版会.  
エンゲルス,フリードリヒ (1956)『自然の弁証法』岩波書店.  
カント,イマヌエル (1961)『純粹理性批判』岩波書店.  
キルケゴール,セーレン (1957)『死に至る病』岩波書店.  
サルトル,ジャン=ポール (1962)『弁証法的理性批判 1』人文書院.  
田中茂範 (1990)『認知意味論：英語の多義の構造』三友社.  
中埜肇 (1973)『弁証法：自由な思考のために』中央公論社.  
茅野良男 (1969)『弁証法入門：正しい認識を求めて』講談社.  
プラトン (1967)『ゴルギアス』岩波書店.  
プラトン (1967)『パイドロス』岩波書店.  
ヘーゲル,フリードリヒ (1998)『精神現象学』作品社.  
マルクス,カール (1956)『経済学批判』岩波書店.  
ラエルティオス,ディオゲネス (1984)『ギリシア哲学者列伝』岩波書店.  
Lakoff, G & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: U of Chicago Press.